Praefatio ad Platonis Symposium

——あるいは導入のロジック／レトリックについて——

浜　下　昌　宏

Summary

Preface to Plato's *Symposium*
——An Essay on the Logic / Rhetoric of Introduction——

Masahiro Hamashita

The introductory part of the *Symposium* (172a–178a) is noteworthy in terms of the following:

First, preliminary dialogues as to how the symposium on "eros" will be reported are so hard to understand that readers are discouraged from reading further.

Second, compared with Plato's other works, the *Symposium* has an unusually long introductory part.

Third, we can detect in the introductory part the difference in character between Apollodorus and Glaucon, the existence of Aristodemus, and especially some episodes about Socrates.

The effect of these factors may be that readers are introduced to the *Symposium* as the introduction to Socrates, the personification of philosophy.

〈1〉

「論語読みの論語知らず」という古諺を頼りに，字義通りの意味で Platon を知らない者が自らを励まして『饗宴』(*Symposion*[1]) を読もうとすると，冒頭部分で読書は挫折させられかねない。紀元前416年に Agathon が悲劇競演に優勝したのを祝って開かれた宴会での議論の様子を伝えるのに，なにゆえにかくも複雑な報告形式にしてあるのか。読者は，伝聞内容に関心を持つ前に，まず人物関係に戸惑ってしまう[2]。

劈頭の Apollodoros[3] の言葉，「ぼくが思うに，君たちが尋ねていることについて，ぼくには準備がないのではない[4]」(172a) の中での「君たち」が誰を指しているかということから始まって，人物関係の不明瞭さに悩まされるのである。

かの饗宴についての情報のルートがいちおう明らかになるのは 173b，Burnet 版のテキスト[5]で37行目までである。そこまでの箇処で，情報伝達者として登場ないし言及される人物を，まず列挙してみよう。

①Apollodoros

②君たち（*πυνθάνεσθε* の主語——172a）

③顔見知りのひとり（*τῶν γνωρίμων τις*——172a）

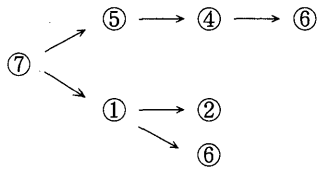
④他のある人（*ἄλλος τίς*——172b）

⑤Phoinicos（172b）

⑥Glaucon（172c）

⑦Aristodemos（173b）

このうち，③は⑥と同一人物である。そこで，当の饗宴に列席した⑦Aristodemos を情報源として，②まで至ろうとする情報の流れを図示するとすれば，次のようになるであろう。



Glaucon は⑦—⑤—④のルートで一度話を聞いていながら，改めて Apollodoros に確かめようとしたのである。いずれにしても Aristodemos が第一の情報源なのであるが，Apollodoros の場合，Socrates に問いただして（173b）確証を得ている。実際，饗宴の場に居た当人による裏付けがない限り，間接的な伝聞はいかに集成したところで結局あいまいなものでしかなく，「何ひとつはっきりしたこと」(*οὐδὲν σαφὲς*——172b，172c) は得られないのは当然である。

Platon は《*Symposion*》を著わすにあたって，最初から Apollodoros に「饗宴」の話をさせるのではなく，かなり複雑に Glaucon のエピソードを入れているのはなぜなのか。そのために読者は戸惑ってしまうにもかかわらず。この点で，我々はまず，Apollodoros と Glaucon の人

物像の対比に気づくことができる。

Glaucon が《*Symposion*》に登場するのはテキスト冒頭の部分だけであり，Glaucon という名前だけを手掛りに Platon の他の著作に登場する Glaucon と同定視する試みは無意味であろう[6]。《*Symposion*》のテキストから明らかなことはただ，彼はかの饗宴について知りたがっている割には不確実な情報しか得ていないということである。饗宴が開かれた時についても，Apollodoros がそれに参加していたかどうかについても，Glaucon はあいまいな知識しかなく，「何を根拠にして」(*πόθεν*——172c) そう考えるのか，と Apollodoros にたしなめられる程である。即ち，Glaucon は，まず，現象として自明な歴史的事実 (*τὸ σαφές*) について無知であり，この点においても Apollodoros の周到な態度と対照的である。あえて図式化して言うならば，饗宴の参加者である Aristodemos から聞き出しながらさらに Socrates の確証を得ようとした Apollodoros の態度は，言葉を介して (dia-logos) 真実に迫ろうとする dialectikē を示唆しており，一方 Glaucon は，情報通の俗人にありがちな，内容の真偽よりも「語り」さえ構成されればよしとする，いわば narratology[7] の立場に近いと言えるであろう。

さらに，「愛知よりも他のすべてを行なうべき」(*δεῖν πάντα μᾶλλον πράττειν ἢ φιλοσοφεῖν*——173a) と考える実際人 (a man of practice) である Glaucon に対し，Apollodoros は，「親しく Socrates に接して彼の言葉も行ないも (*ἂν λέγῃ ἢ πράττῃ*) 自分のものにしようと日々心がけて」(172c) おり，Socrates を知る以前の「行きあたりばったり走り回っていながらひとかどの事をしている気でいた」(173a) 自分の過去を恥じ，「金持や商売人に対して不愉快な気持になる」(173c) という，愛知者を志す人間である。このような，Glaucon と Apollodoros との対比は，後に Diotima＝Socrates によって提示される，「俗人」(*βάναυσος*) と「ダイモン的な人」(*δαιμόνιος ἀνήρ*) との対比 (202d—203a) を先取りしている。即ち，既に philosophia の称揚がテキストの行間に含意されているのであり，philosophia による，俗人としての惨めさの克服 (172c—173a; 173c—d) が示唆されているのである。このことは，読者に Socrates への関心を促し，さらには eros＝daimon 説の正当性を訴える伏線ともなっていると解釈できるであろう。

さて，以上のように考えてみると，《*Symposion*》導入部分のわかり難さもそれなりに「導入」の効果を持っていると言えるのであるが，そもそもどこまでを「序」ないし「導入部」と規定すべきなのか。

〈2〉

テキスト全体の区分について，まず Bury による次のような内容分析を見てみよう[8]。(〔　〕内の数字は Fischer 版によるとされる一般的に慣用な章分けを示す。)

Ⅰ．序：	172a—174a〔1〕
Ⅱ．Aristodemos による前口上：	174a—178a〔2〜5〕
Ⅲ．Phaidros の話：	178a—180b〔6〜7〕

Ⅳ. Pausanias の話：　180c—185c〔8〜11〕
Ⅴ. 第1の幕間：　185c—e　〔11〕
Ⅵ. Eryximachos の話：　185e—188e〔12〜13〕
Ⅶ. 第2の幕間：　189a—c　〔13〕
Ⅷ. Aristophanes の話：　189c—193d〔14〜16〕
Ⅸ. 第3の幕間：　193d—194e〔17〕
Ⅹ. Agathon の話：　194e—197e〔18〜19〕
Ⅺ. 第4の幕間：　198a—199c〔20〕
Ⅻ. Socrates と Agathon の予備的対話：199c—201d〔21〕
XIII. Socrates＝Diotima の話：　201d—212c〔22〜29〕
XIV. 第5の幕間：　212c—215a〔30〜31〕
XV. Alcibiades による Socrates 賛美：　215a—222c〔32〜37〕
XVI. 終章：　222c—終　〔38〜39〕

この区分を Robin による区分[9]と照合してみると，次のように整理できる。

1．序：　172a—178a……Ⅰ〜Ⅱ
2．第1部：　178a—199b……Ⅲ〜Ⅺ
3．第2部：　199b—212c……Ⅻ〜XIII
4．第3部：　212c—223a……XIV〜XVI
5．結びの口上：223b—d……XVI

確かに，Bury の区分ではⅢ〜XIII，Robin では第1部と第2部に当たる，Phaidros に始まり Socrates＝Diotima の話までの eros 論議がテキストの主部とみなすことができるのであるから，その前を序章つまり導入部，そして主部の後を終章と簡便に分けることができる。しかし，どこまでが導入部であるかは，単に形式的に処理できるものではなく，《*Symposion*》読解のための方向づけがどの地点でいちおう終っているかという，ある意味ではこの作品が書かれた意図についての解釈にも関わるような問いに基づいてこそ，はじめて解決可能であろう。そこで，いちおう導入部とみなされ得る部分（172a—178a）の内容と，そこにおいて含まれている注目すべき点を改めて確認することによって，そこが導入部とされる所以を明らかにしたい。

章分けを利用して順次見ていくならば，まず第1章（172a—174a）は文字通りの話の導入がなされているが，そこで言及される人物関係が錯綜していることは既に述べた通りである。これが実際の劇のセリフであったならば，観客はうんざりすることであろう。とまれ，ずいぶん昔（十数年前）に開かれた饗宴においてどのような議論が eros をめぐってなされたのか，という関心が示される。そして，それについての情報が伝達された経路が，関係する人物の特徴の描写と共に述べられる。

第2章（174a—175a）から，Aristodemosに聞いたという話が語られていく。この章で描かれている場面は饗宴の会場（Agathonの家）へ行く途中のSocratesの様子であり，彼が考えにふけり，同行のAristodemosに先に行くよう促したのでAristodemosがひと足先にAgathon家に着いた次第が述べられている。

第3章（175a—175e）は前章の続きで，Socratesの到着を待つAgathon家が舞台である。思索に集中するSocratesを呼びに行ったりして彼の思索を乱さぬよう配慮して，彼以外の者だけで先に食事が始められる。食事の半ば頃にSocratesは現われ席に着く。

第4章（176a—176e）において，全員の食事が済んでいよいよsymposionという段になる。酒を飲む前に互に酒の飲み方について論じられる。

第5章（176e—178a）では続いて，酒席で議論をすることが提案され，論題としてeros賛美に決定する。提案者はEryximachosであるが，彼によれば実質的に問題提起したのはPhaidrosである。Phaidrosの考えでは，古来かくも偉大な神であるErosに対してひとりの詩人も讃歌を作っていないとは不当なことである。Socratesはこの提案に率先して賛成し，「自分はerosに関することがら以外は何も知らない」（*οὐδέν … ἄλλο ἐπίστασθαι ἢ τὰ ἐρωτικά*——177d）と言う。

さて，以上の第1章〜第5章から引き出すことのできる問題点とはどのようなものか。まず第一に，既述のように，間接的伝聞の報告という形式の特異性に注目せざるを得ない。そこに，作者Platonのどのような意図が込められているかは十分に推測してみたいテーマである。第二に，Apollodorosが語っている時間と，その話の内容である饗宴が開かれた時間とが余りに離れている点も尋常ではない。推測される饗宴の時は416B.C.年，この作品の最初の場面は約400B.C.年であるから，約16年前程の出来事が話題となっているわけである。確かに，話に真実性を持たせるために，諸人物の配置や関係が既述のように複雑に工夫されているとみることもできる。しかし，それにしてもこの「古さ」には驚かざるを得ない。他に関連する年号を挙げるとすれば，Platonが《*Symposion*》を執筆したと想定される年はおよそ385—383B.C.年頃であるが，この数字よりも，Socrates刑死の年が399B.C.年という事実の方が注目できるであろう。即ち，この作品においてApollodorosの口を借りて当の饗宴の回想がなされた年の翌年ないし数年後にSocratesは刑死したのである。そしてさらに十数年後にPlatonによってこの作品が書かれている。饗宴の回想は当然Socratesの回想でもある。

第三に，symposionにおける議論のテーマになぜerosが取り上げられるか，ということにも注意を向けることができるであろう。そして第四に，なぜsymposionか，という問いを立てることもできる。Platonによる他の対話篇と比べて，酒席における議論という場面設定の点でも《*Symposion*》は際立っている。我々はPlatonの作品を読む時，dialogosの展開の美事さに引き込まれるが，対話の場に注目させられることはほとんどない。その唯一例外は《*Symposion*》と言ってよいであろう。尤も，この作品をPlatonの他の作品群から離して，「饗宴文学[10]」と呼ぶべき文学形式の伝統の中に位置づけることはできよう。また，古代ギリシアにおける社会的風習としてのsymposionの一例をこの作品に見るという視点を用意するだけでも読

書は成立する。ともあれ，《*Symposion*》において〈symposion〉が含意している内容はきわめて精妙である。まず，悲劇詩人 Agathon の勝利を祝う「宴」であり，食事が済んでからの「酒宴」でもあるが，酒席につきものの芸人たちは斥けて議論をするという，〈in vino veritas〉を志す logos の「饗宴」でもある。また，eros 賛美を競うことが宴席の色どりである時，eros と縁の深い Aphroditē について，彼女が生れた時に神々は「祝宴」を催したことが本文中に言及されている（203b）のも我々の興味を惹く[11]。

さて，以上のように問題を立てる限りでは，《*Symposion*》の読み方として提示できることは，まず，topos としての eros 論に注目することであり，また，古代ギリシアの社会的慣習である symposion の様子を知ることであろう。しかし，それでは，上記の第一，第二の問題点の意味が消去されてしまう。即ち，作品全体としての《*Symposion*》の意義が不問に付されることになろう。そこで，導入部において我々が得た印象が果たして《*Symposion*》に特有なものであるかどうかを確認するために，Platon の他の作品，及び Xenophon による《*Symposion*》との比較を試みることにしたい。

〈3〉

Xenophon の《*Symposion*》が Platon の《*Symposion*》と類似点が多いことは事実である[12]。共に Socrates を中心とした集まりの様子が描かれており，共に或る勝利を祝って開かれた饗宴が題材になっている。さらに，Platon における Aristodemos と同じように，Xenophon においても，招かれなかった客として Philippos が登場し[13]，また，共に eros についての議論がなされ[14]，二種の eros という考えも同じように提示されている。しかしながら，Xenophon においては，饗宴が開かれる場は Callias の家であり，その祝宴は Callias の友人の Autolycos が格闘技（*παγκράτιον*）に勝利したことを祝うためである。さらにまた，Philippos は Aristodemos と違い宴席でたいへん冗舌であり，eros に関する論議も Platon の場合ほど本格的でなく，また，二種の eros を論ずるのが Socrates である[15]という点も，Xenophon の作品の特徴である。

Xenophon の《*Symposion*》は，Platon の作品以上に，かくありなんと思われる symposion の様子を伝えている。踊り子が踊り，キタラも奏でられ，議論が雑談のごとく軽やかに展開していく様の描写によって，Xenophon の作品を気楽に読むことを可能にしている。そこでの Socrates は，酒を楽しみ雑談に興じる，まことにごく普通の人であり，Xenophon はある意味で，〈*καλὸς κἀγαθός*〉[16] たる Socrates を特別視しない見方を示しているとも言えるであろう。実際，有徳の人もまた市井の人であることは事実であるが，しかし市井の人がすべて有徳の人でないことから問題は始まるのであり，philosophia の追究理由も存するのである。この点を Xenophon は看過しているように思われる。Platon の《*Symposion*》が際立っている所以である。

次に，Platon の他の著作を検討するにあたり，比較の視点を確認しておかねばならない。まず，《*Symposion*》と同じような，間接的伝聞の形式で語られている作品が他にあるかどうか。

この点に関しては，まず《*Theaitetos*》を取り上げることができる。

《*Theaitetos*》の 142a—143c は，明らかに導入部とみなすことができる。その箇処では，いわば前口上役の二人によって，Theaitetos という人物についての紹介と，143d 以降の本文の表現方法についての説明がなされている。即ち，実際には Eucleides が Socrates に聞いた話を読者へと，Socrates からすれば間接的に語ることになるのであるが，書き方として Socrates と相手とが直接問答のようにした，ということが述べられている。確かにここでは，間接的伝聞という形式が採られている。しかし，それは読者を戸惑わせる程複雑では全くなく，しかも，142a—143c の部分を削除しても本文の読解に支障をきたすとは思われない。つまり，《*Symposion*》の場合とは比べものにならないくらいに導入部としての役割は小さいと言えるのである。とはいえ，若いうちから Theaitetos の素質を見抜いていた Socrates の眼識なども語られていて，やはり Socrates 回想という意味が導入部に込められていることは確かであろう。

さらに《*Parmenides*》にも，間接的伝聞の報告という形式を認めることができる。126a—127d の部分の，やはり導入部と呼び得る箇処で，Socrates，Zenon，そして Parmenides 等が交した議論が伝えられる経路が述べられている。即ち，Zenon の仲間のひとり Pythodoros から聞いた話を Antiphon が語る，という形式が取られている。この間接話法の意味も理解し難く，《*Theaitetos*》におけるのと同様，導入部を削っても問題はなさそうに思えるし，また，導入部によって我々が得る知識というのは言及される諸人物の関係ぐらいのものであり，《*Symposion*》におけるような何か積極的な内容が解釈できるようにも思えない。

次に，導入部とみなされ得る箇処の有無という点から Platon の著作を調べてみたい。むろん，「導入部」の概念規定が先決問題ではあるが，ここでは厳密な規定に拘らずに，Platon の作品の真骨頂たる対話ないしは演説が始まる前段階，という程度に特徴づけておくことにしたい。その結果，我々がいちおう「導入部」と認めることができる箇処は次のような部分である。

Phaidon:	57a—59c	(Socrates の死に立ち会った Phaidon がその最期の様子を話し出すまで)
Theaitetos:	142a—143c	(既述)
Parmenides:	126a—127d	(既述)
Laches:	178a—181c	(Socrates が紹介されるまで)
Euthydemos:	271a—272d	(Criton が問答の内容に関心を示すまで)
Protagoras:	309a—310a	(Protagoras が紹介されるまで)
Gorgias:	447a—d	(Gorgias が登場するまでのやりとり)
Timaios:	17a—21a	(Critias による古いアテナイの話が始まるまで)

以上のように，試みとして「導入部」を認めることは可能と思われるが，しかしながらその内容についてみると，いずれの作品の場合も《*Symposion*》程の複雑さはない。「複雑さ」というのは，言い換えれば，読者を挫かせ，ないしは戸惑わせることであり，さらに，まさにその読み難さゆえに，じっくりと読み込めば自ずと作品へと導入されていく巧みな構造があるということである。この点においても《*Symposion*》は他の作品にはない特徴を有している。

それでは，Socrates最後の数十日間を描いている，いわゆるTetralogia Iに属する《*Euthyphron*》《*Apologia Socratous*》《*Criton*》そして《*Phaidon*》と，《*Symposion*》とを比べてみよう。Tetralogia Iの後者三篇と《*Symposion*》とを合わせて，Socratesの四福音書とも言われたりもするが，その中において《*Symposion*》が際立っている点はどこに在るのか。一言で言って，Socratesの描き方の違いに我々は注目したいと思う。

Tetralogia Iの作品群は，ある意味でSocrates自身が主題となっている。そして当然のことながら，描かれているのは言論（logos）の人Socratesである。それに対して，《*Symposion*》においては，言説以外の面でのSocratesの様子も描かれ，読者はlogosを介しての道行とは別に，直接謎の人Socratesに導かれるのである。それゆえ，eros論や〈symposion〉の描写以外に，《*Symposion*》の読み方の第三番目として，Socratesという謎への入門ということが挙げられるであろう。

〈4〉

《*Symposion*》がPlatonの作品群の中で際立っているひとつの理由は，本論の議論に入る以前の導入部が比較的長く，しかもその内容が複雑であるという点にある。そのために次のような作用を読者に与えるであろう。まず，伝聞による報告ということと，情報伝達の人間関係が容易には理解しにくいということのために，読者に読書のリズムを作る妨げになっている。この躓きゆえに読者はゆっくりと読んでいかねばならず，自分の読むリズムで《*Symposion*》もまた読むというのではなく，漸次《*Symposion*》のテキストそのものの持つオリエンテーションのリズムに引き込まれていくことになる。テキストに直ちに没入できないということは，いつまでも世俗的関心を引き摺りながら読むということになるが，しかしそれだけに，自分の関心から引き離されてテキストの囚になるプロセスを意識せざるを得なくなる。

《*Symposion*》導入部の複雑さは，ある意味で，logosによっては整理しきれるはずのない，現実の在り方そのものの複雑さを反映している。しかしその不透明さは，Platonの著作の中では或る種異質のtoposによるひとつの方向づけによって消え去っていく。即ち，《*Symposion*》のもうひとつの特徴は，他の作品と比べ，Socratesに関する，言説以外のエピソードが比較的豊富であるということである。実際，当のsymposionにおいても，彼は遅れてやってくるのであり，酒を飲む飲まないに関しても「彼はどちらでも平気」（176c）と言われ，さらに「Socrates以外の者」（*πλὴν Σωκράτους*——173d）は皆惨めであると語られて，Socratesが別格扱いされているのを我々は読むことができる。そして，《*Symposion*》で我々が出会うのは，「不思議な」（*θαυμάζω*——175a）人，Socratesである。

「美しい人のところへは美しくなって行こう」（*ἵνα καλὸς παρὰ καλὸν ἴω*——174a）と意気揚々の態で出掛けたSocratesであるが，同行させたAristodemosが戸惑うような〝奇行〟を見せている。途中ひとりで何か考え込んでいる様子を見せたり（174d）して，歩くのも遅れがちである。彼はよく行きずりの場所で人通りを避けひとりで立ち続けることがある，とAristodemosは言う（175b）。このようなエピソードは，思索におけるSocratesの集中力の凄さ

を語っている。周りの時間への適合を顧慮しない確信の強さをも示している。symposion の席に，他の者たちの食事が半ば済んだ頃に入ってくる（175c）のもその一例と言えよう。以上は，《*Symposion*》導入部に描かれているエピソードであるが，212c 以降の，Alcibiades の登場によって終部へと至る部分でも興味深い Socrates 像が描かれている。 導入部と終部との対応関係については，別稿を用意する必要があるであろう。

また，では Socrates を描くのになぜ《*Symposion*》という作品が生かされているのか，という問いも立てておかねばならないであろう。即ち，eros 論という topos，他の当代の名士たちの中にあって Socrates が際立たされていること，当時の symposion という風習の中での Socrates の様子，等々の検討が，《*Symposion*》の意義を一層明らかにするであろうが，そのために必須な，本論部分（178a—212c）の研究もまた別稿に譲ることにしたい。

さて，《*Symposion*》導入部において分析された諸要素を改めて確認してみると，導入の意味はまさに Socrates への注目を読者に促すことにあると理解できる。

間接的伝聞による報告という形式は，特に Glaucon の知識のあいまいさゆえに，改めて真の姿，即ち正しい Socrates 像の構築の必要性を意味している。さらに，その Glaucon の実際人・世俗人的性格は，それに対比的なダイモン的人間，philosophos たる Socrates を際立たせることになり，当然 philosophia の勧め，さらには eros 論における eros＝daimon 説の優越を示唆することになる。また，Socrates に忠実に付き従った人，Aristodemos の姿も意味深長である。彼は，当の symposion の現場に居合わせた第一の情報源なのであるが，テキストにおいては，間接話法の「彼」として，また，直接話法の「私」として行間に見え隠れしているわけである。《*Phaidon*》において，「Socrates の思い出は自分で話すにしろ人から聞くにしろ，いつでも大いなる喜びです」（58d）と Phaidon が語っているように，《*Symposion*》では，影の話者 Aristodemos の Socrates に対する思いが行論に込められているかのようである。

Platon の著作の尽きない魅力は，いずれもが philosophia へと導き誘ってくれる点にある。むろん，彼は〈*προτρεπτικός*〉ないし〈*εἰσαγωγή*〉と題される類の書物は残さなかったが，生きた philosophos である Socrates の姿を描くことで我々を導くわけである。とりわけ《*Symposion*》は，テキストの構造自体が巧みに philosophia へと誘うように配慮されている。その導入部に注目した我々は，その部分がまさに praefatio ad Symposium であることを強調したわけであるが，それはとりもなおさず praefatio ad Socratem でもあることを知るのである。

註

1）以下，場合によってギリシア語は文字のみ latinize して表記するが，ラテン語表記の Symposium とはしない。
2）例えば『饗宴』岩波文庫版 久保勉訳では，56 ページ 3 行目「あの男（アポロドロス）」とされているが，正しくは「あの男（アリストデモス）」である。尤もこの訳書は昭和 41 年 10 月 20 日第 19 刷のもので，最近の版では訂正されている。
3）ここも註 1）のように，Apollodorus とはしない。
4）傍点は引用者。
5）*Platonis Opera,* tomus II, Oxford, 1973

6) Cf. R. G. Bury, *The Symposium of Plato,* Cambridge, 1932, p. 3, 172c の注 ; S. Rosen, *Plato's Symposium,* 2nd ed. , Yale U. P., 1987, p. 13ff. ;『プラトン全集 5 』岩波書店, 1974, p. 5, n. 7

7) narratology についてはさしあたり,『語り――文化のナラトロジー』(記号学研究 6), 東海大学出版会, 1986, を参照のこと。特に概説は, 松島征「ナラトロジーの現在」が簡便である。

8) Cf. Bury, *op. cit.* , pp. vii—xv

9) Cf. Platon, *Oeuvres complètes,* t.IV, 2e partie, texte établi et traduit par L. Robin, Les Belles Lettres, 1981, pp. xxviii–cix

10) Ploutarchos の《*Symposiaca*》(邦訳『食卓歓談集』柳沼重剛訳, 岩波文庫) によれば,《*Symposion*》ないしそれに類する表題で宴席での会話を記した作品には, Platon, Xenophon, Aristoteles, Speusippos, Epicuros, Plytanis, Hieronymos, Dion (Academeia) などによるものがあるという (岩波文庫版邦語訳, p. 12)。しかし, このうち, Platon 及び Xenophon を除けば, Aristoteles のものはわずかに断片のみが残っているだけで, 他については全く散逸してしまっている。従って, そのような「饗宴文学」と呼ぶべき一連の作品群ないし文学的伝統を認めるとしても, それらの共通点や差異については調べようがない。後でみるように, Platon と Xenophon の作品の比較だけが可能である。なお, Platon の《*Symposion*》を「饗宴文学」の中で位置づける試みについては, R. McKeon, *Thought, Action, and Passion,* The Univ. of Chicago Press, 1954,p.31f.を参照のこと。

11) 但し, ここで日本語で「宴」「酒宴」「饗宴」「祝宴」と訳し分けたのはあくまでも解釈によるものであり, テキストの厳密な terminology によれば,〈*συμπόσιον*〉は表題に使われているのみであり, 本文では〈*δεῖπνον*〉〈*σύνδειπνον*〉〈*συνουσία*〉等が使われているという McKeon の指摘がある。Cf. McKeon, *op. cit.* , p. 35

12) Xenophon と Platon の《*Symposion*》に関する比較については次の二書を参照のこと。Xénophon, *Banquet, Apologie de Socrate,* texte établi et traduit par F. Ollier, Les Belles Lettres, 1972, p. 30ff. ; Platon, *Oeuvres complètes,* t. IV, 2e partie (*op. cit.*), p. cixff.

13) Xénophon, *op. cit.* , I, 11 et sqq. (p. 40ff.)

14) *ibid.* , VIII (pp. 70–79)

15) *ibid.* , VIII, 9 (p. 72)

16) 尤もこの概念も, Xenophon がどの程度の意味づけで Socrates に対して抱いていたかが問題である。

(原稿受理　1989 年 4 月 21 日)